



ワークショップC 「情報を活用し読書をする子を育てる系統的な手法」

塩谷京子(静岡市立森下小学校 司書教諭 / 学校図書館実践研究会 代表)

ワークショップCでは、塩谷先生のプレゼンテーションをもとに、情報活用と読書、それを支える言葉の力を、発達段階に沿って育てていく方法を考えました。十年間に渡るご実践と、子どもの実像が浮かび上がる最新データに基づく先生のお話には、圧倒的な説得力がありました。

1) 読書・情報活用と言葉

本ワークショップは「読書」と「情報活用」の力を系統的に育てていくための手法をテーマとする。前提として、これらの力が重視されるようになった背景と、両者の関連とを確認したい。

議題1 今、なぜ読書が注目されているのか。

読書が注目される理由・社会的要因などについて考えた。それぞれが付箋に書き出した理由を分類し、グループごとにキーワードを発表する。(グループ討議→発表)

[グループから出たキーワード]

- ・「自己形成」「豊かな感性、人間性の伸長」
- ・「情報の取り出しと解釈」「PISA型読解力との関連」
- ・「学力・読解力・コミュニケーション能力の育成」

多く挙がったのは、「子どもたちの人間的成長に関わる」という意見だったが、情報が氾濫する社会状況の中で、「情報を正しく取捨選択する力が養える」という意見も目立った。読書が重視される背景には、さまざまな理由があるようだ。



議題2 情報活用において、重要な観点は何か。

次に、元アメリカ国務長官・キッシンジャーの言葉をもとに、情報活用において重要な観点とは何かを考えた。(全体討議)

キッシンジャーの言葉

わたしの孫たちは、わたしよりも、一瞬にして多くの情報を得ることができます。でもわたしは孫たちより、情報の抽出・分析・評価をする能力に長けているのです。

[フロアの意見]

- ・情報を自分のものとして生かすには、どのように情報を選択し、分析・評価するかが重要である。
- ・情報はネットで簡単に得られる。むしろ活用能力が重要だ。キッシンジャーが示唆するように、情報は、集めるだけでは意味

を成さない。しかし、学校現場における調べ学習はまさにこの状況に陥っているのではないかと。

議題3 読書や情報は「言葉」とどのような関係があるのか。

グループ・ワークの締めくくりとして、読書・情報活用と「言葉」の関わりについて考えた。(グループ討議→全体討議)

[フロアの意見]

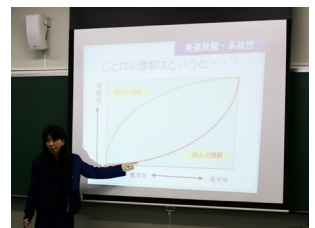
- ・すべての情報はいったん頭の中で言葉に置き換えて理解される。従って、言葉の力がなくて生きた理解にならない。映像にしても文字にしても、見聞きしたものをいったん「言葉」に置き換えることなしに、「思考」「判断」することはできない。読書と情報は別のものというイメージがあるが、「言葉を介して理解する」点では同じである。指導の中でも「読書」「情報」「言葉」をつないで考えると、見えてくるものがあるのではないかと。

2) 子どもの心と読書

言葉の習得にあたっては、発達段階や系統性を考慮しなければならない。言葉と密接な関わりのある「読書」・「情報活用」も、その点は同じである。ここでは特に、子どもの心の発達段階と「読書」の系統性について考えていく。

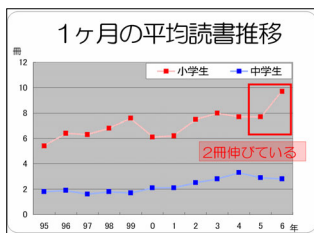
■「言葉の理解」に関する発達段階

生まれたての子どもは、言葉を「聞いて」理解することしかできない。発達とともに「読んで」理解する力がつき、やがて両者が逆転する。これが高学年～中学校ぐらい。「小学校に入ったのだから、自分で本を読みなさい」では、言葉の理解がそれ以上進まなくなる。低学年のうちには、読み聞かせが大切だ。



■子どもの読書傾向と「読書をする子」の育て方

2006年10月現在、小学生の1ヶ月の読書量は平均9.7冊。ここ10年ほどほとんど変わらなかったが、この2年で2冊も伸びた。朝読書の採用校が1700校増えた影響である。このことから、学校で読む時間を作ることが、いかに大切かがわかる。



また、「いつ本を読むか」というアンケートで注目すべきは「寝る前に読む」という回答。この比率は小学生から高校生まで変わらない。つまり、家で読む子は読書習慣が定着する。だから、「朝読」の次は「家読」に進めることが大切だ。

■学校図書館の改善

学校図書館には、子どもの欲求にかなう本が必要である。図書館に来る習慣がつけば、読む本の種類はそこから広げている。「教師が好きな本」＝「子供が好きな本」とは限らない。ブックリストなどを活用し、幅広い選書を目指したい。なお、本を薦める際は内容のレベル・難易度を押さえておく必要がある。

[学校図書館に用意したい本のジャンル]

- ・リアル系(図鑑、恐竜、生き物、電車など)
- ・ファンタジー、ミステリー、ホラー(それぞれ全く別のジャンル)
- ・YA(ヤング・アダルト。大人への心の転換点を扱ったもの。)

■「子どもの心の発達」と読書指導

①小学校1年生

読書指導に最もウェイトをかけるべき時期。この時期に「本の扱い方」「本の借り方・返し方」などの基礎を教え、毎日図書館に通う習慣をつけることが、後の読書指導にも大きく影響する。

参考:静岡県読書ガイドブック「本とともだち」

<http://dokusyo.pref.shizuoka.jp/pref/guidebook.htm>

②小学校2年生～YA年齢

分野を問わず、幅広く。読み聞かせ・アニメーションなどで多様な情報を与えたい。年齢的には聞くほうが理解しやすい。

③YA年齢(小学校5年11月以降～中学生)

教師の薦めより、友達どうしの薦め合いが響く。読書記録の公開や仲間内での読書紹介が有効である。また、日常的に「友情・友達」「本当の自分・私」「生と死」「家族」「存在」などを考え始める年齢。このようなテーマを扱った本を薦めたい。

3) 子供と情報活用

教師にとって、「調べ学習」は悩みの種である。時間がかかる、その割に理解が深まらない……。しかし、これは「できる・できない」以前に、子どもが情報活用スキルを「知らない」からである。この章では、「情報活用スキル」の系統的指導を紹介したい。

■調べ学習に必要なスキル

- ・調べることを決める ⇒ テーマの決め方・修正のしかた
- ・調べる方法を決める ⇒ 調べる方法の種類・計画の立て方
- ・調べる ⇒ 本やWebでの調べ方・人への聞き方
- ・まとめて伝える ⇒ 伝え方の方法や種類

例1 百科事典で調べるためのスキル

知りたいことが百科事典に載っているとわかれば、子どもは喜んで調べ始める。教師は「調べる」ためのスキルを系統的に教え、事典が日常的に目にふれるよう配慮すればよい。

①3年:「背」「爪」「柱」などによる検索の方法を教える。

②4年:総索引による検索の方法を教える。

※その他、学習資料集(各種データ、知識事項を掲載。ポプラディアでは12巻。)の存在を教えると調べ学習に役立つ。

例2 テーマを作るためのスキル

テーマを作るためには、「絞り込む」「広げる」という2種類の操作が必要。両者は別の概念なので混同して教えないこと。

①3年:テーマを「絞り込む」

⇒テーマを作る第1段階。テーマから調べたいことを焦点化。

・「の」をつけて考えると、テーマから逸れない。(大豆「の」作り方、大豆「の」取れるところ、大豆「の」食品……)

・さらに絞り込む。「大豆の食品」＝「しょうゆ」「納豆」……)

本や事典の見出し、ネット検索のキーワードは「○○の△△」。

この形にしておけば調べやすい。また、優先順位を決めておけば、下調べの後にテーマを変更するのも容易である。

②4年:テーマ(「～について」)をいったん「問題文」に戻す。

⇒結論を書かせる・結論までの展開を踏ませるため、「～について」を「～にはどんなものがあるか」等の問題文に戻す。

③5年:テーマを「広げる」

⇒5年以降の指導内容。イメージが固定しやすいテーマは、ウェブでいったん概念を広げてから絞り込むことが必要。

・例:「犬＝ペット」と思い込むと、絞り込みでも「犬のえさ」「犬の病気」等とらわれてしまう。いったんウェブで広げてから(「働く犬」「犬の歴史」「犬の格言」……)絞り込むとよい。

例3 レポートにまとめるスキル

○5年:どういう構成で書くか、まとめ方の具体像を示す。

⇒ア)テーマ、イ)動機・目的、ウ)方法、エ)調べたこと・結果、オ)まとめ、カ)参考文献

- ・4年で学習した新聞(見出し/写真・図/本文)を1枚にまとめるのだと説明する。＝4年と5年の学習内容がつながる。



まとめ

「言葉」には系統性がある。「言葉」と密接な関わりをもつ読書・情報活用スキルも、発達段階に沿った系統性を意識すれば短時間で効果的に指導できる。系統的な指導と実践との繰り返しによって、子どもの「考える力」はスパイラルに伸びていく。